

ワンダーフォーゲル部

六十七年の歩み

昭和三十年代

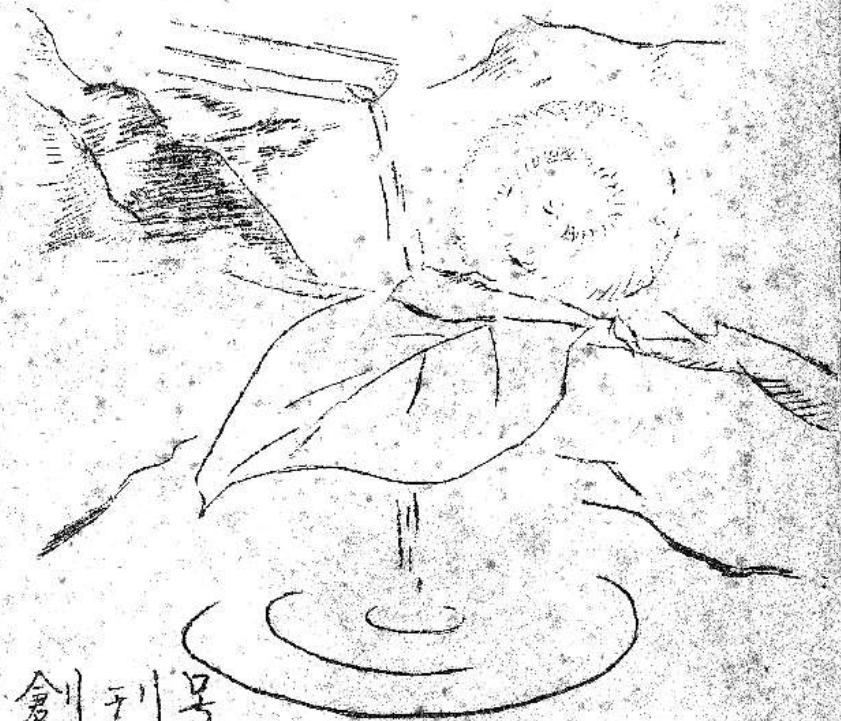
和歴	西暦	卒部生	ワングル	大学
昭和31年	1956年		<b>創部</b>	
昭和32年	1957年			
昭和33年	1958年			
昭和34年	1959年	1 野々山 浩司 ほか 6名		
昭和35年	1960年	8 酒井 逸雄 ほか 11名		原子力研究所発足
昭和36年	1961年	20 加賀屋 智三 ほか 12名		
昭和37年	1962年	33 白石 昭治 ほか 15名	事故 松山 亮氏 北海道渡島半島海岸岩壁から転落	
昭和38年	1963年	49 望月 隆信 ほか 17名	事故 石橋 正道氏 丹沢にて(医師の診断では死因不明)	
昭和39年	1964年	67 海老塚 塚仁 ほか 16名	<b>山小屋設立委員会発足</b>	
昭和40年	1965年	84 船越 靖彦 ほか 14名		







# 蝸牛



創刊号

Musasi Wandervogel

発行日 一九五七年二月十一日  
発行所 ワンダーフォーゲル同好会  
非売品

武蔵工業大学 ワンダーフォーゲル同好会

## 役員

会長	椿	睦
副会長	野々山	浩司
総務部長	小山田	眞一
会計部長	寺島	武
企画部長	村滝	价志
記録部長	長町	昌児
出版部長	角	忠幸

# かたつむり創刊号（昭和三十二年）

創刊にあたって

或る人が隣の駅まで行くのにタクシーを拾った。これは現代の典型の様に思はれる。我々は歩くことを忘れていたのである。歩くことの利益や楽しみは既に色々と言はれて居る。従ってここではくどくどと述べない。

一方我々の武蔵工大も年々発展をしつつある。このことは武蔵工大生として非常に嬉しいことであるが、逆にみれば講堂一つ建ってぐんと発展したと言う程発展の余地が十分にあるのである。これは我々の学校はまだまだ不十分であると言うことを物語るものである。発展性があるというのには必ずしも発展が約束されて居るといふ意味でないのであって、個人が自覚し、個人を高揚させることによって初めてそこに全体の発展が考えられるのである。

この様な時にワンダーフォーゲル同好会が誕生したことは誠に意義あることだと思ふのである。此の会の内容も今年になって一段と充実し、新役員が決定し、機関誌も発行されることになった。この会を更により一層充実発展させていくためには会員一人一人が努力を重ねていかねばならないのである。この会が今後どうなるかはいつに会員個々の自覚にのみ掛っているのであるから、このことを常に念頭に置いて一人ひとりが責任をもって活発に活動していこうではありませんか。



かたつむり創刊号（昭和三十二年）

我々の学校はまだまだ不十分であると言うことを物語るものである。発展性があるというのは必ずしも発展が約束されて居るという意味でないのであって、個人が自覚し、個人を高揚させることによって初めてそこに全体の発展が考えられるのである。

この会が今後どうなるかはいつに会員個々の自覚にのみ掛っているのであるから、このことを常に念頭に置いて一人ひとりが責任をもって活発に活動していかうではありませんか。

ワンダーホーゲル同好会会長 椿 曄

# かたつむり3号（昭和三十五年）

序

部長 本多 達三

人間社会の生活は、益々合理化され科学は日々に進歩している。我々技術者は、科学の面に於てはデスカバラーにならなければならぬ。その面に於ては趣味的な愛着までも持ち、又苦悩にも耐えうる性質を先入的にある程度持ち、又、後天的にも勉強によってモダンサイエンスまで多少消化している。然し「社会科学的な面で我々は如何かと考えてみると、自然の本来の姿に触れる機会は少なくなり、文明に変重している。

野山を歩き、体力を養う。又自然を愛し、人と人との交友、協力精神寺に欠けて来つつあるのが現在我々の状態であるのではないだろうか。ある人が言っていた。「我々技術者は、太い一本の神経にたよりすぎて、仕事をし、生活している。我々の周囲には芸術がある。科学的な面で行きずまった時には、芸術的に物を考えることによって又新しい道が広げられる。現代の我々は、多数の神経を持ち、それらを縊り合せて不動の精神を造り、人生を送るべきだ」と。私は誠に簡明な表現で我々を批判し、我々に指示を与えていると思う。芸術は自然をそのまま表現することであると思う。自然を正しく取らえることによつて芸術が生れ、価値が生じて来る。自然は又、その現象を取られることによつて科学が生まれて来る。

ワンダールフォーゲル部員は「自然をより多く愛しそれによつて芸術的神経を養成して「科学的な、しかも繊細な神経をより多く持つようにして載きたい。我々は高級な山に行く技術は比較的早く体得し得られる素養はあると思う。その他に体力、状況判断力、精神力などの問題は残るが……。然し、私はワンダールフォーゲル部員に述べたい。我等ワンダラーは、自然の内に本来の人間の姿を見つけてゆくことを最終の目的と思つて、活動して戴き度い。自然の内、本来の人間の姿の中には、誠があり、それらが行動になつて表われるときに、人間が完成されてゆくと私は考えている。

かたつむり3号（昭和三十五年）

部長 本多 達三

私はワンダーフォーゲル部員に述べたい。

我等ワンダーラーは、自然の内に本来の人間の姿を見つけてゆくことを最終の目的と思って、活動して戴き度い。

自然の内の本来の人間の姿の中には、誠があり、それらが行動になつて表われるときに、人間が完成されてゆくと私は考えている。

# かたつむり4号（昭和三十六年）

ワンダーフォーゲル部に寄す

学長 山田 良之助

ワンダーフォーゲル部は聞くところによると部員も相当多く、毎年夏期休暇中に活発な活動をしていると云う。昨年は青森県に出かけたが、今年は四国に出かける計画であるとのことである。

部の活動としては、調査しようとする地域の歴史、文化、産業等各種の方面の実体をあらかじめ調べておいて、これを実際に調査すると云う。工学部の学生だからといって、工業的な内容を調査するのではなく、人文、社会方面のことが寧ろ調査の主体をなすのはあるまいかと、テントを張って旅行することからいって、もっともなことと思う。本学の学生がそのような活動をすることは、私はそれもよいことと思っている。

学生生活において、学問の道に精進することとはもっとも必要のことであるけれども、夏期休暇をこの種の部生活に送ることはまことに有意義なことである。殊に都会の文化から遠くはなれた地域で、その土地の人々とも親しみ、歴史を顧み、風俗を知ることがはまことに結構なことと申すことができる。特に、部員の諸君が、チームワークを尊び、統制ある行動をとることは、部生活のよい一面といえよう。私は以上のような意味で部員がよくその目的を達成せられ、立派な結果を得られて、学生生活のよい思い出とせらるるよう希望してやまない。

かたつむり4号（昭和三十六年）

学長 山田 良之助

殊に都会の文化から遠くはなれた地域で、その土地の人々とも親しみ、歴史を顧み、風俗を知ることはまことに結構なことと申すことが出来る。

特に、部員の諸君が、チームワークを尊び、統制ある行動をとることは、部生活のよい一面といえよう。

昭和四十年代

和歴	西暦	卒部生				ワングル	大学
昭和41年	1966年	99	久保田 穂	ほか	14名	<b>山小屋竣工</b> OB:100名突破	大学院修士課程開設
昭和42年	1967年	114	大沢 能孝	ほか	12名		
昭和43年	1968年	127	田口 哲雄	ほか	8名		短期大学部廃止 大学院博士課程開設
昭和44年	1969年	136	奥津 正敏	ほか	12名		
昭和45年	1960年	149	星野 正美	ほか	7名		
昭和46年	1971年	157	小林 俊明	ほか	5名	事故 本多先生 じんじろげ小屋にて転落	
昭和47年	1972年	163	川辺 和夫	ほか	6名		
昭和48年	1973年	170	近藤 秀樹	ほか	1名		
昭和49年	1974年	172	笠倉 和昌	ほか	5名		
昭和50年	1975年	178	中村 直樹	ほか	5名		









# かたつむり8号（昭和四十年）

「かたつむり」八号に寄せて

部長 安味 貞正

「かたつむり」とはなかなか洒落たものだ。

僕が初めて部長を引き受けたとき見せてもらったこの小冊子の表紙に素朴な中に実によく自然を表わしているようで、大変親しみを感じたものだ。表紙の三本の木は、あるいは可愛い「とかげ」に見え、またあるいは「人」が飛び廻っているようにも見えて楽しい。この表紙が何にもまして、部員の心を表わしていると思う。衆にたがわず内容もなかなか面白い。野山をかける諸君の中にも相当の名文家がいると思える。

さて、本年は諸君大いに活躍をしてくれた。僕はこの夏に山小屋の鋤入式に参如をさせてもらったが、自分達の山小屋を自らの手で築き上げようとする意欲と団結心を身をもって感じる事が出来たことを諸君に感謝している。現地でのワングル特製「カレーライス」のあのまるやかな味は忘れられない。

ところで、現地の方々の理解深い御援助と、OBのあたたかい励ましが諸君の目的達成になくはならぬものである事地を、諸君達は常に心に留めておかなければならない。僕は本年は山小屋以外には参加出来なかつたが、この体験から、夏合宿を初め全フンダーフオーゲル活動での諸君の行動がどんなものであつたか想像出来る。

本年はWV部が、悪い意味で有名になった。それが他大学の出来事にせよ、どんなに馬鹿げた原因にせよ、尊い人命を粗末にした事件に対しては他岸の火としてしまふことは出来ないだろう。WV活動の目的はいまさら云うまでもなく大自然と人間との敬虔な融和にある筈である。ともすれば「自然に挑み」「自然を征服する」という錯誤のもとで、自己を鍛える前に他人を鍛えてそれを練成と称しているようだが、これは深く考え直されなければならぬことであろう。

WV活動がより正しく理解されるためにも、我々はもっと努力しなければならぬ。武蔵工大のWV部は大変よいとは思いますが、自重するとともに、他大学のWVにも啓蒙するファイトをより高めてもらいたい。来年のより明るく、力強い活躍を期時します。

（昭和四十年十二月）

かたつむり8号（昭和四十年）

部長 安味 貞正

本年はWV部が、悪い意味で有名になった。それが他大学の出来事にせよ、どんなに馬鹿げた原因にせよ、尊い人命を粗末にした事件に対しては他岸の火としてしまうことは出来ないだろう。

WV活動の目的はいまさら云うまでもなく大自然と人間との敬虔な融和にある筈である。ともすれば「自然に挑み」「自然を征服する」という錯誤のもとで、自己を鍛える前に他人を鍛えてそれを練成と称しているようだが、これは深く考え直されなければならないことであろう。

# かたつむり9号（昭和四十一年）

ワンダーフォーゲル部創立十周年によせて

学長 山田良之助

ワンダーフォーゲル部が創立十周年を迎えるという。過ぎ去った過去を振り返ると早いように感ずるが、部員がその年その年に活躍したあとを顧みると、思い出はつきないであろう。

本学のワンダーフォーゲル部には、先輩の方々がつくりあげた立派な伝統がある。南国の島に、北海道に、下北半島に、その地方地方での部としての訓練とともに、その地方の風土、民俗、文化を調査研究して立派な成果をあげてきたと思う。

前から山小屋をもちたいという念願があったことを聞いている。それが、今夏、部として独力で仕上げたのである。資金も僅少ではない。資金の苦労ばかりではなく、山小屋の位置まで建築資材を運びあげる労力も大変なものであったと聞いている。これらの困難を克服して、立派に山小屋を建設したのである。部員の協力一致と、思い立ったところを必ず成し遂げる実行力は称賛に価するものである。これは部の十年間に築きあげたよい伝統の姿らしむるところであると思う。私は山小屋に「敬天愛人」の一書をおくって、その落成を祝った。

本学のワンダーフォーゲル部が、この輝かしい伝統を守り、今後ともますます堅実な発展を遂げることを心から祈るものである。

かたつむり9号（昭和四十一年）

学長 山田良之助

前から山小屋をもちたいという  
念願があったことを聞いている。  
それが、今夏、部として独力で仕  
上げたのである。資金も僅少では  
ない。資金の苦労ばかりではなく、  
山小屋の位置まで建築資材を運び  
あげる労力も大変なものであった  
と聞いている。

これらの困難を克服して、立派  
に山小屋を建設したのである。部  
員の協力一致と、思い立ったとこ  
ろを必ず成し遂げる実行力は称賛  
に価するものである。

これは部の十年間に築きあげた  
よい伝統の姿らしむるところであ  
ると思う。私は山小屋に「敬天愛  
人」の一書をおくって、その落成  
を祝った。

# かたつむり9号（昭和四十一年）

ワングルと共に十年

部長 本多達三

ワンダーフォーゲル部と共に十年という題でなにか書くようにと云われて、もう十年にもなるのかという感じと、実に長い間部長を続けたものだ、今にして自身で驚いている。この十年間を思い出してみると、ワングル部では大先輩だが、当時学生であった野々山君が我が寺沢研究室に来て、ワンダーフォーゲル部を作りたいので部長になってくれと云われたが、これがそもそもワンダーフォーゲル活動というものを知る最初であった。ドイツで始められた“山歩き”で、戦後盛んになって来たもので、野や山を歩くのだという。それならば危険は無いと、軽い気持で引受けた次第である。これが今にして思えば運のつきという処だ。其の後の役得は記念祭、追出しコンパの時に、酒とシヨウチュウ（当時はこれを飲む事が多かった）を御馳走になったり、焼鳥を焼いて皆で食べたたり、又、ブタ汁を吸ったりしたが、焼き鳥と云っても焚火で焼きその量も新橋か新宿のような盛り場でなければ、これ程一度に焼くまいと思われる量だった。時間が掛かるので、湯がいてから焼いたが、その肉の匂いと皿に乗せたのを見ただけでゲップが出た。又、我部の名物ブタ汁にしても、キウリの御新香とブタ汁だけで、御飯は一部は半煮、一部はダンゴになって居て、しかもアルミの容器ではとても喉を通らなくて困った。これらは記念祭の前夜祭の時だったと思う。又校庭でファイヤーストームを囲んで山男ならではの歌を合唱したり、スクラムを組んだり、又常にジンジロゲの踊り？が出た。このジンジロゲも最近になって気がついたが、OB連中のジンジロゲの方がなにか年季が入って来るせいとか、私には良い気持ちになる様に思われる。これは踊りの年期だけでなく、体力が出来た為もあるようだ。ワングル部員はこの十年間変わらなずに無口で山男的な“匂い”がプンプンするところが誠に気持ちが良い。これは私等の学生時代の“バンカラ”に通じるので、それで一種の郷愁もあるかもしれない。

ワングル部の部長をして一番有難かったことは、研究室に気持ちの通じ合うワングル部員達が来てくれたことである。野々山君、桑原裕武、山岸正人、成田豊興、上野潔、望月隆信、大山繭男、高木光行、海老塚仁の諸君を思い出す。これら現在OBの諸君等にはいろいろと無理なことを卒業論文でお願いして申し訳なかった。

最後にこの十年間の思い出の内、特に大きな哀しみは、北海道渡島半島西部で松山亮君、丹沢での石橋正道君の死に遭遇したことで、私は実に責任を感じます。現在でも父兄の方々には申し訳なく思っています。

しかし、我が部も更に発展すべく山小屋を望月町協和財産区内に、船越、久保田、大沢等、主将の直接的な努力、又、OB、現役等の総力の結晶で約1/3の経費で立派な山小屋が出来、八月十四日に竣工式が行われた。

我がワンダーフォーゲル部も十年選手になったのだ。大いに頑張ってみます。人間性を深める場としてワンダーフォーゲル部を活用されんことを望みます。

かたつむり9号（昭和四十一年）

部長 本多 達三

当時学生であった野々山君が我が寺沢研究室に来て、フンダーフォーゲル部を作りたいたので部長になってくれと云われたが、これがそもそもワンダーフォーゲル活動というものを知る最初であった。ドイツで始められた“山歩き”で、戦後盛んになって来たもので、野や山を歩くのだという。それならば危険は無いと、軽い気持で引受けた次第である。これが今にして思えば運のつきという処だ。

この十年間の思い出の内ですべてに大きな哀しみは、北海道渡島半島西部で松山亮君、丹沢での石橋正道君の死に遭遇したこと、私は実に責任を感じます。現在でも父兄の方々には申し訳なく思っています。

我が部も更に発展すべく山小屋を望月町協和財産区内に、船越、久保田、大沢等、主将の直接的な努力、又、OB、現役等の総力の結晶で約1/3の経費で立派な山小屋が出来、八月十四日に竣工式が行われた。



昭和五十年代

和歴	西暦	卒部生				ワンゲル	大学
昭和51年	1976年	184	安田 遠身	ほか	3名		大学院修士課程開設
昭和52年	1977年	188	神藤 安夫	ほか	6名		
昭和53年	1978年	195	今井 輝雄	ほか	4名	事故 佐藤 亮氏 石鎚山にて滑落	短期大学部廃止 大学院博士課程開設
昭和54年	1979年	200	内藤 俊之	ほか	6名	OB:200名突破	
昭和55年	1980年	207	山田 充直	ほか	8名		
昭和56年	1981年	216	池谷 道雄	ほか	7名		
昭和57年	1982年	224	古森 明雄	ほか	2名		
昭和58年	1983年	227	佐藤 義和	ほか	9名		
昭和59年	1984年	237	麻生 伸二	ほか	4名		
昭和60年	1985年	242	森 秀雄	ほか	3名		







# かたつむり20号（昭和五十二年）

自然を楽しむ

学長 石川 馨

私が旧制高校の頃、昭和一〇年前後であるが、ワンダーフォーゲルがさかんであった。みんなで日曜日などに低い丘陵地帯を、ドイツ語でワンダーフォーゲルの歌をうたいながら自然を楽しんだものである。

最近新聞などをみていると、ワンゲルがややスパルタ的になってきているような気がする。工業化された社会で自然をゆっくり楽しむチャンスへの現代社会では、ワンゲルでゆっくり自然を楽しむことが、人間形成に必要な一つの条件であるろう。  
ワンゲルを楽しんで下さい。

かたつむり20号（昭和五十二年）

学長 石川 馨

最近新聞などをみると、ワ  
ンゲルがややスパルタ的になっ  
ているような気がする。

工業化された社会で自然をゆっ  
くり楽しむチャンスのへった現代  
社会では、ワンゲルでゆっくり自  
然を楽しむことが、人間形成に必  
要な一つの条件であろう。  
ワンゲルを楽しんで下さい。

# かたつむり23号（昭和六十年）

じんじろげ小屋とOB

学長 石川馨

昨昭和六十年八月十三日に、じんじろげ小屋二十周年記念式典があるというので、家内と一緒に小屋へ伺いました。丁度前日夕方に日本航空JL一二三便が望月町の向う側の群馬県の山中に墜落したという大惨事の直後であったので、ラジオでニュースを聞きながら、私の車で、望月町まで行きました。そこからWV部OBの車で、細い山路を小屋の近くまで行き、山道を歩いて楽にじんじろげ小屋につきました。

ついて見ると自樺林の中に、「じんじろげ小屋―武蔵工業大学WV部」という立派な銘板のついた小屋、炊事場と広場があり、さらに「じんじろげ鉦泉」までできており、溪谷からうまく水も引いてあり、本当に良い山小屋であると感心しました。これはWV部の歴代のOBの皆さんの永年にわたる努力と汗の結果つくられたものであり、これこそ部活動の結晶であると思います。

小沢OB会長以下大勢のOBが小さなお子さん、奥さんづれで参加され、現役と一緒に準備しておられる、部活動の美しい姿でした。間もなく来賓として財産区の方、町の青年団の方に顧問の安味先生、西脇・神山の元・新学生部長も参加され記念式典が行われ、多くの感謝状が渡されました。そのときのいろいろのご挨拶の中で、特に財産区の方のご挨拶が私には非常に素晴らしいものでした。最近の学生はだらしのない人が多いのに、我が武蔵工大のWV部の方は毎回必ずしっかり挨拶に来られ、山を汚さず、山のルールを守り、きれいに掃除をして帰り、他大学より断然しっかりしており、他大学の模範です。」と非常にほめて頂きました。私もWV精神の入った非常に良い部活動である嬉しく思いました。皆さんも、この良い伝統・名声を永久にOBと共に守って行って下さい。

夕暮れとともに、大きな鉄板を用いた楽しい、バーベキューと美味しい手製の刺身、さらにビール、ウイスキーの清水割りなど、本当に山奥の山小屋と思われぬような御馳走・山海の珍味でした。その後、大きなかがり火を中心にしたファイヤーパーティーで歌ったり踊ったりで、私も旧制高校時代に戻ったような気がしました。本当に有難うございました。

以上の経験から、WV部はOBと現役が結びついた非常に良い部活動であると思います。WV部は前に事故を起こしたこともあり、色々苦しいこと、問題もあると思いますが、皆でそれを乗り越えて初めて、人生に役立つ経験も出来、良い永い友人も出来るものです。現役の人もすぐにOBになるのですから、OBと現役一緒にあって将来ともWV部を愛して、さらに良い部活動として、我が大学の模範になって下さい。



かたつむり23号（昭和六十年）

学長 石川 馨

そのときのいろいろのご挨拶の中で、特に財産区の方のご挨拶が私には非常に素晴らしいものでした。

最近の学生はだらしない人が多いのに、我が武蔵工大のWV部の方は毎回必ずしっかり挨拶に来られ、山を汚さず、山のルールを守り、きれいに掃除をして帰り、他大学より断然しっかりしており、他大学の模範です。」と非常にほめて頂きました。

私もWV精神の入った非常に良い部活動であると嬉しく思いました。皆さんも、この良い伝統・名声を永久にOBと共に守って下さいます。

昭和六十年代

平成一桁年代

和歴	西暦	卒部生				ワングエル	大学
昭和61年	1986年	246	三島 保人	ほか	6名		
昭和62年	1987年	253	畑 和宏	ほか	3名		
昭和63年	1988年	257	荒井 一馬	ほか	5名		
昭和64年 平成元年	1989年	263	広野 正彦	ほか	1名		
平成2年	1990年	該当者なし				新OBなし	
平成3年	1991年	265	高柳 悟	ほか	2名		
平成4年	1992年	268	小林 英治	ほか	2名		
平成5年	1993年	271	佐藤 守道	ほか	4名		
平成6年	1994年	276	加藤 宏幸	ほか	8名		
平成7年	1995年	285	越智 栄次郎	ほか	4名		







武蔵工業大学創部 30周年記念式典  
体育会フッダーボール部



平成八年

〜十七年



和歴	西暦	卒部生				ワングエル	大学
平成8年	1996年	290	渡辺 浩史	ほか	6名		
平成9年	1997年	297	井戸上 達	ほか	4名	OB:300名突破	
平成10年	1998年	302	高橋 義典				環境情報学部開設
平成11年	1999年	303	坂本 潤嗣	ほか	3名		
平成12年	2000年	307	名畑 泰宏	ほか	3名		
平成13年	2001年	311	篠田 征吾	ほか	8名	初の女性OB誕生	
平成14年	2002年	320	荒井 善正	ほか	3名		
平成15年	2003年	324	杉田 博司	ほか	3名		
平成16年	2004年	328	中溝 充				
平成17年	2005年	329	関根 伸吾				







# かたつむり24号（平成八年）

『ワンダーフォーゲル部の諸君へ』

学長 古浜庄一

独和辞典によればワンダーフォーゲルとは一九〇一年 Karri Fischer によって設立された青年徒歩旅行奨励会、又はその会員となっており、私的ではオートバイや車で走り回るより確かに健康的で、自然の緑の恩恵を最も強く受け、友情を深めるための機会も多く、課外活動としての条件を備えており、今後一層会員も増し活発な行事をしてもらいたい。私は、子供とき村の後の三〇〇メートルぐらいの山の坂道を、冬休みになると朝五時頃から5～10人ぐらいで登り、頂上付近の松の枯れ枝をとって背負って下りた。僅かな薪のために一日中を費やした。現在の学生諸君には想像できない貧村の実態でした。しかし、振り返ってみれば、それが私の体や考え方を形成した。その中にはワンダーフォーゲルの長所も入っている。人間は肉体を運動さすことで人間でありうる。食料や環境問題で人類の生存が危いと言われているが、体を動かさない影響の方が早く危機を迎えそうだ。ワンダーフォーゲルこそ一生続けたい運動である。ただ一つ、試合が無いように少しさみしい。ただ部活動の発展を祈る。

かたつむり24号（平成八年）

学長 古浜庄一

人間は肉体を運動さすことで人間でありうる。食料や環境問題で人類の生存が危いと言われているが、体を動かささない影響の方が早く危機を迎えそうだ。ワンダーフォーゲルこそ一生続けたい運動である。ただ一つ、試合が無いように少しさみしい。

部活動の発展を祈る。

# かたつむり25号（平成十一年）

『ワンダーフォーゲル部の活動に期待して』

学長 堀川清司

ワンダーフォーゲルの活動がわが国に導入されたのは何時頃のことなのか、私は知らない。石川馨元学長は「かたつむり」二〇号に「私が旧制高校の頃、昭和一〇年前後であるが、ワンダーフォーゲルが盛んであった。」と書いておられる。従って、昭和初期の旧制高等学校では、その活動が活発であったものと思われる。そもそもワンダーフォーゲルはドイツ語の渡り鳥のことであり、これから転じて一九〇一年にカール・フィッシャーによって創設された青少年徒歩旅行運動奨励会の活動をいう。この運動が世界に伝播し、やがてわが国にも導入されたのである。本学でも昭和三十二年（一九五七）年に創設されたのである。武蔵工大WVOB会名簿を見ると昭和三十四年度卒業生からOBナンバーが登録されておおり、その数は三〇〇を超え、伝統のある部であることが分かる。毎年度、新人歓迎合宿、新人養成合宿、夏合宿、山小屋合宿、リーダー養成合宿、春合宿の6回の合宿を定例の行事としてしている。最近は少子化が進み、共同生活の経験が皆無に近くなった現在、このような合宿は困難を伴うものと思われる。しかしながら、その折の経験は社会人となってから大いに生かされることは間違いないであろう。

そもそもワンダーフォーゲルの活動は山野を踏破し、その間に自然を満喫することに、その意義があると推測する。私が子供の頃には東京でも身近に自然が豊かで、鳥、虫、魚、花と戯れることが可能であった。それは現在ほとんど不可能に近く、孫達の日常を見ているとなんとかわいそうに思えてくる。このような時代であるが故に、人間性の涵養の為にも自ら努力して自然に積極的に触れる必要があるのではないだろうか。更には、山野を踏破する間の苦しみを克服して心身を鍛えることも、若い時にこそ可能である。

OB会名簿からそれぞれの学年の部員数を調べてみると、零ないし十八名となり、年度によって盛衰があったようである。ここ数年は部員を確保することも難しくなっていると聞くが、ワンダーフォーゲル部の有為な活動を考えると極めて残念に思われる。広報活動を展開して部活動の活性化を図られるように期待する。

かたつむり25号（平成十一年）

学長 堀川清司

最近は少子化が進み、共同生活の経験が皆無に近くなった現在、このような合宿は困難を伴うものと思われる。しかしながら、その折の経験は社会人となつてから大いに生かされることは間違いないであらう。

O B会名簿からそれぞれの学年の部員数を調べてみると、零ないし十八名となり、年度によって盛衰があったようである。ここ数年は部員を確保することも難しくなっていると聞くが、ワンダーフォーゲル部の有為な活動を考えると極めて残念に思われる。広報活動を展開して部活動の活性化を図られるように期待する。



# かたつむり27号（平成十七年）

『ジンジログ山小屋創立40周年を迎えて』

顧問 堀内 則量

前顧問安味貞正先生から引き継いで、平成15年度よりワンダーフォーゲル部顧問に就任致しました堀内です。故本多達三先生が当部創立に奔走されてその礎をおつくりになり、残念な不幸を超えて安味先生がその意志を継いでジンジログ小屋の創立など、顧問として平成14年度までの永きに渡って当部の育成に努めて来られました。このように創部以来40数年に渡る栄えあるワンダーフォーゲル部の顧問に、一時でも名前を連ねさせていただきましたことは、私にとって大変光栄に存じます。一方では創部時に比べ最近の部員数が激減していることは大変残念なことでありますが、これは当部に限られたことではなく、「帰宅部」という言葉すら生み出されたように、日本全体として集団・団体生活を得意としない若者が多くなったことは最近の風潮のようであります。

さて、私が初めて「ジンジログ小屋」という言葉を耳にしましたのは、昭和41年春に本学を卒業して電気工学科の末席に籍を置いた時であります。ワンゲル部調達の自由が丘のお店「K」に卒論仲間の○君に連れて行かれたのもこの頃だと思えます。当時卒論配属学生のH君が「ジンジログ小屋」に行く度に、佐久のにごり酒をお土産に買って来てくれて、当時流行の森山カヨ子の歌を肴に、その都度研究室で宴会を開いたものでした。その後、私は電気工学科から本学原子力研究所に異動しましたが、研究室の教職員も皆山好きとあって、卒論研究では度々ワンゲル部所属の学生諸君が配属希望してきました。ハイキング程度ではあります。山歩きするのは、いつしか我が研究室の伝統となってしまうました。そして、とうとう卒論学生に連れられてジンジログ小屋を初めて訪問したのは平成14年の軽井沢での研究室夏合宿の帰りでした。この時の印象は、すいませんが、大変汚いというものでした。これ以来、3度山小屋を訪ねましたが、今年は初めて一晩泊めていただきました。素晴らしい白樺林、満天の星空、山水でといで薪での飯炊き、それにここには立派なステンレスの風呂があります。これらは今から40年以上も前で忘れていた高校生時代の山岳部合宿の日々を思い出させるものであります。このように心を込めて山小屋を造りあげた先人OB、卒業後もなお、護り維持し続けてきた多くのOBの方々、そして何かとご協力してきていただいた望月町の方々に、敬意と感謝の意を表します。

最後になりましたが、私はワンゲル部の顧問として本学の学生諸君に次の2つのことを訴えたいと常々考えています。第一は野山の自然の素晴らしさを是非知って貰いたい。失われた星空、大気・海水の汚染、地球温暖化など自環境の破壊が今問題となっっています。本当の自然の素晴らしさを知ってこそ地球の環境保護の大切さが理解できるようになるでしょう。第二は集団・団体生活のあり方をきちんと理解して貰いたい。部活動は小さいながらも一つの社会生活を形成していきます。苦しいとき、悲しいとき、友と語り合うとき心がほぐれ、人との絆の大切さが見えてきます。40年以上も経ってからもなお、山岳部時代の友が時々訪ねて来てくれます。そして酒を酌みながらのいつもの話題は重い荷物を担いで苦しかった山登りのことですが、それが今は楽しい思い出として、また今日の頑張りの基となっていることを確認し合っています。

結びとして、ジンジログ小屋創立40周年記念にあたり、当ワンダーフォーゲル部がよき伝統、素晴らしき山小屋を護り続けながら、益々今後発展していくことを祈願して止みません。

かたつむり27号（平成十七年）

顧問 堀内 則量

創部時に比べ最近の部員数が激減して、いることは大変残念なことでありますが、これは当部に限られたことではなく、「帰宅部」という言葉すら生み出されたように、日本全体として集団・団体生活を得意としない若者が多くなったことは最近の風潮のようであります。

私はワングル部の顧問として本学の学生諸君に次の2つのことを訴えたいと常々考えています。第一は野山の自然の素晴らしさを是非知って貰いたい。失われた**星空**、**大気**・**海水の汚染**、**地球温暖化**など**自然環境の破壊**が**今問題**となつて**います**。本当の自然の素晴らしさを知ってこそ地球の環境保護の大切さが理解できるようになるでしょう。第二は**集団・団体生活**のあり方をきちんと理解して貰いたい。部活動は小さいながらも一つの**社会生活**を形成しています。苦しいとき、悲しいとき、友と語り合うとき心がほぐれ、人と人との絆の大切さが見えてきます。

平成十八年

〜二十七年

和歴	西暦	卒部生				ワングエル	大学
平成18年	2006年	330	細谷 洋介	ほか	1名		原子炉廃止
平成19年	2007年	332	辻横 剛	ほか	1名		知識工学部開設
平成20年	2008年	334	井波 芳仁	ほか	1名		
平成21年	2009年	336	小佐野 洋樹				東京都市大学に改称
平成22年	2010年	337	柴 雄太郎				
平成23年	2011年	338	小林 壘				
平成24年	2012年	339	石崎 勇人	ほか	5名		
平成25年	2013年	345	野口 拓人				
平成26年	2014年	346	鈴木 貴也	ほか	12名	初の女性主将誕生	
平成27年	2015年	360	関根 明日香	ほか	8名	創部60周年記念式典開催	







# かたつむり28号（平成二十五年）

『着任のごあいさつ』

京都市大学WV部 顧問 白旗 弘実

着任といいましたもすでに四・五年たっていますので、ごあいさつというほどでもないと思いますが、平成二十一年度途中から顧問をしております白旗と申します。京都市大学となって初めての機関誌「かたつむり」の刊行に際して携われた関係OBおよび学生各位にお礼申し上げます。

すでにじんじろげ小屋でのOB会などでお会いした方々もいらっしゃいますが、ごく簡単に自己紹介いたします。

私はワンダーフォーゲル部などはじめ山登り、山歩きする部活には所属していませんでした。出身地は、と聞かれると茨城と答えますが、ご存じのとおり茨城県は大半が平野の県です。育ったのも利根川のそばでしたので、山はほとんどありません。登ったことがある山といえば筑波山・加波山・少し高いのは山形県の鳥海山・少し珍しいのはフィリピンのタール山あたりででしょうか。タール山は世界一低い活火山と本には書かれていました・・・。

「ワンダーフォーゲル」を調べると、野外活動が根本のようですし、各学校での活動も少しずつ違うようです。いずれにしましても、学生には無理のない範囲で、存分に自然を満喫してほしいと思います。私も茨城の自然が大好きですので、自然と親しむことは好きなほうだと思っています。

最後に、学生の活動をサポートしてくださるOBの方々にお礼申し上げますとともに、今後とも一層のご支援をお願いいたします。



かたつむり28号（平成二十五年）

顧問 白旗 弘実

東京都市大学となって初めての  
機関誌「かたつむり」の刊行に際し  
て携われた関係OBおよび学生各  
位にお礼申し上げます。

「ワンダーフオーゲル」を調べると、  
野外活動が根本のようですし、各  
学校での活動も少しずつ違うよう  
です。いずれにしても、学生に  
は無理のない範囲で、存分に自然  
を満喫してほしいと思います。私  
も茨城の自然が大好きですので、  
自然と親しむことは好きなほうだ  
と思っています。

最後に、学生の活動をサポートし  
てくださるOBの方々にお礼申し  
上げるとともに、今後とも一層の  
ご支援をお願いいたします。

平成二十八年  
〜令和四年



